Newsletter

多分野交流演習ニュースレター

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/

1999 年 11 月 10 日

24

楽しい多分野交流演習

ワーキンググループ座長　岸本　美緒

私が複数教官による合同演習にはじめて参加したのは１９９４年であり，コース共通演習と多分野交流演習とを含めて数えると今年で６年目になる。形になる成果を残しえているか，とか学生への教育効果はどの程度あがっているか，などと自問すれば，必ずしもすぐに肯定的な答が出るわけではないけれども，私自身の正直な感想をいえば，とにかく「面白い，楽しい」の一言につきる。昨今はわけもわからず忙しく，他大学や他部局の研究者の方々はもとより，同じ学部で顔をあわせている同僚ともなかなか学問の話をする時間がないのが残念だが，多分野交流演習は，そういう飢餓感を満たしてくれる数少ない機会である。

私の関わっている多分野交流演習（小島主査の「人間と価値」）には，１０世紀頃から現代に至る東アジアを研究している１０名ほどの研究者が参加しておられる。歴史・文学・思想史・政治学・社会学など分野は様々で，時代も地域も互いに若干異なりながら，それでも何か共通の問題関心がある，そういう研究者たちがざっくばらんに議論しあうのだから，楽しくないわけがない。専門が近すぎると細かい内輪の議論に陥りがちだし，遠すぎるとただお話拝聴ということになりがちだが，そのあたりの按配もちょうどよい。どんな球を投げても誰か受け止めてくれるし，思わぬ方向から球が飛んでくるのもスリリングである。適度の緊張感と解放感。はっきりした答が出るわけではないが，こういう議論のなかでモヤモヤと醸成されるもののなかから，自分の次の研究へのエネルギーやヒントが生まれてくる感じがする。

ただ，昨年度までは毎週の演習を楽しみにほぼ皆勤していた私も，今年度は会議などでしばしば大幅な遅刻を余儀なくされているのは残念である。近年の大学教官を圧迫している多忙さが緩和されれば，このような場を活性化してゆくための人的資源は，東大には無限にあるといえよう。なおこのような場から自然に生まれてくる成果をさらに広く社会に発信してゆく試みとして，多分野交流演習から生まれた論文集の第１冊目『死生観と生命倫理』が刊行された。編者の関根教授から紹介文をいただいているので，ご覧いただければ幸いである。

『死生観と生命倫理』編者から一言

関根清三

８月下旬に東大出版会から『死生観と生命倫理』が上梓されました。これは、１９９５年度から９７年度にかけて行われた多分野交流研究演習の４つのプロジェクトのうち、同名の第１プロジェクトの研究報告書ということになります。出版会さんとしては、これをゆるいシリーズとして出して行きたいご意向のようで、たまたま私どものプロジェクトが原稿の集りが早かったため、幸か不幸かシリーズ第１号となってしまいましたが、これを叩き台として、今後より充実した報告書を作って行っていただければと念じております。

執筆の先生方、院生諸氏、皆さん予想をも上回る力作をお寄せくださり、このように活字にする努力の中で、演習では言いっぱなしだったことのポイントが見えて来る喜びは大きなものがありました。また「死生観」だけ、あるいは「生命倫理」だけを切り離して論ずることはよくなされますが、両者を結び付けたところがこの本のミソで、それなりの存在価値はあるのではないかと自負しております。この演習のそもそものコンセプトはディシプリン横断性の実現ということにあったわけですが、生命操作がどこまで許されるかといった、現代の生命科学の発展によってもたらされた社会的問題に、人文社会系の研究者も、生と死をどう捉えるか、という古くて新しい問いにさかのぼって、共同に知恵を出し合って行くことの意味は決して小さくないことと感じます。

こうした知見を開く機会を与えてくださり、またそれを実現するために力を合わせてくださいました、歴代の研究科長をはじめとする参加教官・院生諸氏に、改めて御礼を申し上げるとともに、忌憚のない御意見を畏れつつお待ちしています。

プロジェクト案内

人間と価値：変革と人間観

主査　小島　毅　水曜５・６限

本プロジェクトは多分野交流演習としては２年目である。昨年同様、冬学期のみの毎週水曜日に開催している。参加者多数により、場所を多分野交流演習室から、１号館 215 番教室に変更して実施している。

■ 9 月 22 日　ガイダンス

受講希望学生を集めてガイダンスを開催。今後の予定等を説明し、各回の担当者を決めた。

■ 10 月 6 日　第１回

題材：渡辺　浩（法学政治学研究科教授）「進歩と中華――日本の場合――」

担当：鈴木弘一郎（東アジア思想文化博士課程１年）

「進歩」という理念は、元来東アジアには存在せず、その出会いは、１９世紀になってからだった。その時、日本人の精神に何が起こったのかを、その出会い以前の思想史の流れと関連づけて考察している。著者は江戸時代において用いられていた「開け」という語に注目し、これが「文明開化」の推進力になったことを指摘する。ただし、これは「進歩」とは全く異質の概念である。日本においては、江戸時代からあった「中華化」の願望を満たすものとして西洋化が進められた面があり、それが「文明の進歩」の観念に代位したと結論づけている。明治維新は「儒学化」だった。

今後の問題点として、日本・中国・朝鮮におけるダーウィニズムの作用の違いとそれぞれの思想史的背景との関係や、タイムスパンの取り方一つで進歩史観は循環史観と共存しうることへの説明などが必要と思われる。

自由討論では、中国における歴史意識の問題、その日本との異同がまず議論された。また、江戸時代の政治組織が、一見全能な権力機構に見えながら、その実、あらかじめ予想されない事態に対しては機能不全に陥る構造であったことが、幕末に「公論」重視の動きを生じる背景にあったことが、著者から補足的に論じられた。さらに、武士たちが既得権益を放棄して新体制に移行した理由をめぐって議論された。

なお、本プロジェクトの今後の予定については、

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tabunya/human_value/1999/index.html

を参照されたい。（文学部トップページからもリンクしている）。

プロジェクト案内

「言語・文化・越境」

主査　沼野　充義　木曜５・６限

このプロジェクトでは、夏休みまでに以下のように会合を行なった。
5 月 13 日　参加者の自己紹介と今後の方針について打ち合わせ
5 月 27 日　報告：三浦雅士「バレエとプラトン」（要旨はＮｏ．２３に掲載済）
6 月 10 日　報告：和田忠彦（イタリア文学）「カルヴィーノの目と耳」
6 月 24 日　報告：渡辺 裕（美学芸術学）「異文化接触としての宝塚歌劇」
7 月 15 日　報告：小林銀河（博士課程）「ロシアと西欧における「自由」の姿　――ドストエフスキーと E.フロムの対比を手がかりに」
7 月 22 日（木）鴻野わか菜（博士課程）「モスクワ蝿の詩――カバコフ・記憶の物語」

今回は上記のうち、和田忠彦・鴻野わか菜氏の報告の要旨を掲載する（渡辺裕・小林銀河氏の報告の要旨は都合により次回に掲載）。要旨の執筆はそれぞれの報告者自身による。

6 月 10 日 和田忠彦（東京外国語大学教授／イタリア文学）「カルヴィーノの目と耳」

テクストと向き合っていて、不意に「声」が聞こえてくる瞬間がある――などと書くと、いかにも感覚だけにたよって読んでいるみたいで、およそ非科学的だと謗りを受けそうだけれど、読むという行為を実践する現場では、少なからず、そうした瞬間の持続のなかに抛り込まれている自分に気づくことがある。

たぶんテクストの「声」をはじめて意識したのは、織田作之助の「夫婦善哉」を読んでいたときだった。それまで映画を通してしか知らなかった短篇を、なにかの会合で採りあげることになって、例によって寝転んで文庫本をながめていたら、会話からだけでなく、地の文からまで大阪言葉が響いてきて、思わず居住まいを正したことがあった。

以来、テクストと向き合うときには、きまって「声」が聞こえてくる瞬間を待つようになった。とりわけイタリア文学の翻訳にかかわるようになってからは、その瞬間が訪れないことには、実際の作業そのものがはじまらないという経験を重ねるうちに、いまでは、「声」の聞こえない作品の翻訳は引き受けるのを躊躇うようになった。

というわけで、「多分野交流演習」の場を借りて、この漠然とした《テクストの「声」》について参加者のみなさんがどう考えているか訊いてみようと思い立って、拙訳を素材に、「カルヴィーノの耳と眼」と題して話してみた。
生来いわゆる「音痴」だった作家が、視覚描写にこだわることによって、結果として、20 世紀を代表する作曲家ルチアーノ・ベリオを驚嘆させるほどの《音楽性》を獲得したのはなぜか――その疑問に答える手掛りをさぐろうとした発表者の身勝手に、参加者のみなさんは活発な議論で応えてくれた。

7 月 22 日 鴻野わか菜（東京大学人文社会系大学院スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程）「モスクワハエの詩～イリヤ・カバコフ　記憶の物語～」

長びく会議でいねむりしないために資料に鉛筆で落書きをしていたら、資料の余白やすみっこに描くのに慣れてしまい、いざ白紙を前にしてもどうしてもまんなかには描けなくなってしまった男の話、「なにかを捨てることは記憶を捨てることである」と考え、すべてのゴミを、ゴミを拾った時の状況を記したメモをそえて部屋にとっておく男の話――テクスト・絵画・インスタレーションを手がけるウクライナ出身の前衛芸術家カバコフの作品は、数々の面白い物語にみちている。どこまでが冗談でどこからが本気なのか煙に巻くような滑稽な語り口のカバコフの作品は、しかし、崩壊した大国や過去をどう記憶するかという＜記憶＞の問題を現代に投げかけているようにも思える。今回の発表では、カバコフの作品に頻出する「ゴミ（遺失物）」「固有名詞」「収容所的空間」な

どのテーマを中心に、カバコフにおける＜記憶＞の問題を考察した。発表後の議論ももりあがり、キーファーとの共通性や、カバコフが属していたモスクワ・コンセプチュアリズムとアメリカ・コンセプチュアリズムの相違、寺山修司のパフォーマンスとの類似について、各国の専門家の先生方が持論を展開してくださったのは、非常に刺激的だった。カバコフの作品には「空を下をのぞきこむように見る」という公案めいたテーマが時々出てくるが、それはムージルや大江健三郎の作品にも共通した感覚であるという指摘も受け、多分野交流演習ならではの比較文化的な視点が新鮮で勉強になる。授業のあとには、先生方も学生も一緒に本郷界隈にくりだし、場所を変えての「交流」があり、ふだんは著書のなかでしかお目にかかれな憧れの先生方とお話しできるのもとても楽しい。ただ、終電近くまで飲んだあと、「帰ってからまた勉強する」という先生方の言葉を聞くと、あとは寝るだけだと思っていた私は酔いもふっとび（？）反省してしまうのだった。

本プロジェクトの９月以降のスケジュールは以下の通り（いずれの会も午後５時より、多分野交流演習室にて）。この演習は、正規には大学院博士課程在学者のみを対象としたものですが、興味のある方は（座席に余裕のある限り）資格・学年を問わず歓迎いたします。教官の方々もぜひ気軽に覗いてみてください。各回完結するトピックによる研究会形式ですので、興味のある特定の回だけの「飛び入り」の出席も大いに歓迎いたします。

9 月 30 日（木） 菅原美佐（東京都立大学大学院／ドイツ演劇）「現代ドイツ演劇の諸相」
10 月 21 日（木）柴田元幸（東京大学助教授／英米文学）「現代アメリカ文学を生半可にではなく読む」（仮題）
11 月 11 日（木）金英（Kim Hyun Young）（東京大学人文社会系大学院博士課程） 「ヨシフ・ブロツキー 亡命の詩学」（仮題）
11 月 25 日（木）報告者未定

プロジェクト案内

「６０年代　アジアの選択」

主査　桜井由躬雄　木曜　５・６限

６月１７日　講師　村井寛志（東京大学・院生）「６０年代の中国」

現在の中国の経済発展は８０年代以降、特に９０年代前半の改革開放経済政策におうが、しかし、その傾向は多くの点で文革期に求められる。文革期は党中央の経済計画機能が麻痺した時代であって、地方の独自な施策が展開され、その多くは文革後の経済発展に結びついている。文革期は単に混乱期としてではなく、積極的に捉えられるべきである。

６月２４日　講師　桜井由躬雄（主査）「６０年代のベトナム」

合作社はベトナム戦争の遂行に人的供給と食糧供給に両面で大きな意味をもった。しかし、合作社は文明的社会単位にとどまり、ついに村落に内在化する集団に代置することがなかった。事実上６０年代末までに生産組織としては破産し、統制としての意味のみが残った。

９月１７日　講師　井上あえか（客員助教授）「ネルーからインディラ・ガンディーへ――６０年代インド内政の転換」

６０年代のインドはネルー時代が終焉し、７０年代のインディラ・ガンディー時代を準備する混乱の時期であった。６０年代のインド政治の特徴は以下のように考えられる。（１）一方に偏らない両方からの援助の獲得（つまり非同盟の変質）、（２）社会主義化政策は会議派の政策であり共産党のそれではなかったことの明確化（共産党州政権の迫害）、（３）ガンディーの後継者としてのパテールとネルーの２人の系譜が、インディラによって一本化（ネルーを継いだシンジケートがパテール派のデサイを淘汰し、インディラが自分を育てたシンジケートとの権力闘争に勝って、会議派継承の正当性を得た）。

９月２４日　講師　野口博史（上智大学助手）「６０年代のカンボジア―東南アジアにおける『平和のオアシス』」（野口博史）

カンボジアにおける６０年代は「シハヌーク時代」といいうる。５４年に独立し、７０年に内戦が始まるまでの期間にあたる。しかし、カンボジアの６０年代とはフランスに庇護されたわずか６００万人程度の国における「黄金時代」に過ぎず、アジア全体にとっての意味は小さいといわねばならない。二種類の共産主義政党の統治を経験した末に、２０世紀も末になってタイやフィリピンが卒業しかかっている麻薬、国際的陰謀の草狩り場となっている。６０年代のカンボジアは社会経済的には農業生産が安定し、人口が増加し、多数の農民にとっては安定の時代であったが、政治はシハヌーク個人の手を離れ、官僚によって統治されるような制度化が進んだ、つまり官僚的後継者の時代への転換期であったと考えられる。国際環境の中では、６０年代破綻の理由は国内に原因があるとは考えにくく、ベトナム戦争の影響を大きく受けた。

１０月７日　講師　斎藤瑞枝（東京大学・院生）「６０年代のビルマー暗黒の時代」

ビルマの６０年代は暗黒の時代とされる。ネウ

イン政権はいわれるような排外主義ではなく、東西両陣営から大量の借款、援助をうけているし、インド、中国とも微妙なバランス外交を維持している。しかし国内の対インド、華人政策はきわめて厳格で、農民への統制政策とともに、生産を急速に低落させた。しかし、暗黒の時代の暗黒であるゆえんは、この時代の情報は極端に限定され、なにが起こったかがまったく不明なことであり、その暗黒さの中で、人々がネウイン体制しか知らない世界が作り出されていった過程を二人の知識人の軌跡を紹介しながら考える。

１０月１４日　講師　村島英治（早稲田大学・教授）「６０年代のタイ」

タイの６０年代は１９３２年の立憲革命以来の旧構造の大きな変革期である。この期間に政治のイニシアチブは軍部から資本家層に移行し、国王の役割が拡大した。華人層がタイ人社会の中の中間層に移行し、農民社会の寺院を中心にした共同体性が失われた。しかし、もっともおおきな変化は、これまで官僚予備軍にすぎなかった高学歴層がカウンターエリート集団を形成し、７０年代以降の政治社会に社会主義運動、ＮＧＯ運動としての大きな意味をもったことである。

プロジェクト案内

「情報と文化：人文社会学」

主査　小佐野重利　月曜 ５・６限

第３回から第５回までの演習についてまとめて報告する。前回までに引き続き学生の参加者は少なく、内容も学生にはもったいないともいえるレヴェルを保っている。

第３回は６月２１日。報告者は東京国立文化財研究所の鈴木廣之氏。テーマは「古器旧物と文化財―明治前期における『もの』の想像力―」。鈴木氏の報告は、「古美術」という概念がどう形成されたかを知りたいというのがひとつの動機になっている。たとえば、明治４年に大学が太政官弁官に対して行った献言に用いられ、同年の太政官布告「古器旧物保存方」に結びつく「古器旧物」という言葉の内容は、「祭器ノ部」から「化石ノ部」にわたり、人工物も自然物も含む。いろいろなものが雑多に集まっているように見えるが、それはわれわれの眼からそう見えるのであって、当時の人々にとっては必然的な意味があったのではないか。そのような問いかけから始まり、明治期の博覧会と美術行政の沿革をたどりながら、美術史学などが腑分けする以前の文物のありようを再考することを試みた。具体的な素材として用いられたのは、松浦武四郎『撥雲余興』、蜷川式胤『観古図説』、それに明治初めの博覧会目録である。『撥雲余興』は昭和１７年に田中芳男の子孫から東大図書館に寄贈されたのだが、田中文庫には入らず一般図書として登録されているとのことで、研究所の蔵書である『観古図説』の「陶器之部」とともに、その実物を閲覧しながら報告を聴いた。報告後は、出土物がいつから人造物と認識されたか、古器旧物保存方の分類法など、考古学に関連する議論のほか、『観古図説』や博覧会目録をテクストとして当時の物の認識のかたちを読み解いていく可能性も提案されるなど、活発な発言があった。考古学と美術史学の大学院生の参加を見たが、日本近代史を専攻する学生でこのテーマに興味を持つ人の出席があればさらに話の厚みを増したのではないかと思う。

なお、この回ではほかに大学院生の馬渕美帆氏（美術史学）から、科学研究費によって実施している「探幽縮図」の画像データベース化に関する研究報告があった。また、佐藤健二氏（社会学）から、総合研究博物館で今秋開催される展覧会「ニュースの誕生」に関連して、社会情報研究所保管の新聞錦絵についての報告があった。いずれもコンピューターの画面をスクリーンに提示する方式を用いて行われた。

第４回は７月５日。報告者は世田谷パブリック・シアターの高萩宏氏。テーマは「アーツマネージメント教育の現在」。大学在学中から劇団夢の遊眠社の創立以来のプロデューサーを務め、その後イギリスでの「ジャパン・フェスティバル１９９１」の舞台芸術部門ディレクター、東京グローブ座制作担当支配人などを歴任した高萩氏が、多くの資料をもとに標記のテーマを解説した。従来は芸術を支援することによって社会が芸術から何かを得るなどとは考えられなかったのだが、現在は「社会と芸術の出会いをアレンジする」アーツマネージメントの必要性は各国で顕在化している―　そういったことを前提に、各種研究報告書、研修会の資料、白書などを用いながら、日本の芸術運営をめぐる状況、アーツマネージメント教育の海外と日本の状況について、報告が行われた。

高萩氏自身がコロンビア大学大学院のアーツ・アドミニストレーション・プログラムに留学したときの体験も披露されたが、一面で実務教育に徹したその教育内容は、参加者にとってかなりの驚異だった（たとえばあるレポートの課題―アマチュアから出発した交響楽団がしだいに大きくなり、市庁舎の建てなおしに合わせて新しい専用ホールを建てようということになった。この楽団の次に取るべき方策を評議員になったつもりで考えよ）。有形無形の文化資料を研究する立場の者が、その知識と経験を生かして、資料の活用法が問題となる実践的な領域にまでどれだけ有意義な貢献ができるのか、考えさせられた報告であった。しかし、アーツマネージメント教育がどこかでなされなねばならないことはもはや疑えない。現に手がけている大学もあるのだが、仮にこの大学が本気で乗り出すとしたら社会へ与える効果は大きかろうというのは高萩氏の発言であった。総合文化研究科の表象文化論専攻の大学院生数人の参加があり、この分野への高い関心を示した。

第５回は９月１３日。報告者は群馬県埋蔵文化財調査事業団の高井佳弘氏。テーマは「埋蔵文化財保護行政の現状と問題」。埋蔵文化財の定義から始まり、発掘調査の数と費用、保護行政の体制、出土品の保存と活用、埋蔵文化財保護行政と大学教育・職員研修まで、各種の統計資料を用いての解説がなされた。平成８年度には４１，０００件を超える発掘届があったほど、全国各地で工事に伴う発掘が絶えず行われ、埋蔵文化財は百万の単位で増加している。出土品の整理・保存・展示はとても追いつかず、そのための施設の不足という問題も抱えている。都道府県にかなりの数の担当職員が配置されているが、考古学専攻の職員の比率は少し低下しているという意外な報告もあった。大学における考古学教育は必ずしも埋蔵文化財保護行政を視野に入れているわけではないので、文化財保護法の知識や発掘技術が要求される現場とのギャップがあるらしい。特に市町村にただひとり配属された場合、文化財に関するあらゆる業務に関与せねばならず、困難が大きいという。考古学と行政の間を埋める埋蔵文化財行政学といった応用学的な分野が必要という文化庁記念物課の調査官の声が紹介されたように、ここでも資料そのものを研究する既存の学問分野から資料の保存と活用を考える新しい学問分野への橋渡しが問題となった。物を知ることが物を生かす道を探ることにつながっていく、そんな研究教育が可能だろうか。この回は考古学の大学院生数人の参加があり、積極的な発言がなされた。

次回は１０月１８日、片山英男（西洋古典学）、月村辰雄（フランス文学）両氏の報告をもとに図書館の問題などを討議する。

（文責　佐藤康宏）

「多分野交流ニュースレター」
第 24 号
平成 11 年 11 月 10 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
多分野交流プロジェクト研究
ワーキンググループ事務局発行
責任者　岸本　美緒

連絡先　情報メディア室
TEL: 03-5841-3880
FAX: 5841-8949

Edited by Kaori Domae
Designed by Noboru Koshizuka